

<b>Title</b>	はしがき
<b>Author(s)</b>	聖学院大学総合研究所
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.56 別冊,2013.10 : 3-6
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4739">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4739</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## はしがき

ここに収めた鼎談は、聖学院大学全学教授であられた隅谷三喜男先生の学問的な歩みをたどることを目的になされたものである。ここに鼎談が計画された経緯とこのたび公開するに至った理由を記しておきたい。

### 1. 鼎談「学問的自伝」の出版をめぐつて

隅谷先生には、この鼎談に先立って、聖学院大学で二回にわたって「学問的自伝」を語っていただいたことがあった。第一回は、全学教授に就任されたばかりの一九八九年四月二七日に聖学院大学で開催された研究会で、「わたしの学問的自伝 1」という主題で講演された（『聖学院大学総合研究所紀要』第一号、六五〜八四ページ、一九九〇年）。この講演では、「学問的姿勢がはつきりしてきた一九五〇年代のはじめまで」が語られている。第二回は、一九九〇年六月六日に「一社会科学者の学問的自伝——わたしの学問的自伝 2」という主題で、やはり聖学院大学の研究会で講演されたものである（『聖学院大学総合研究所紀要』第二号、二六〜四四ページ、一九九二年）。ここでは、第一回

の続きとして、一九五〇年代後半から『台湾の経済』を出版されるまえの一九九〇年代はじめまでの学問的な足跡が語られている。

このほかにも一九八六年には『ひとすじの途』（新地書房）を出版されているが、その第一章「学問と信仰のはざままで――歩みつつ考えてきたこと」（同書、一〇三二ページ）を執筆されている。この論文は、「1 戦時過程を生き、考える」「2 戦後の混乱期の中で」「3 研究室と現実社会の中で」「4 アジアとのかかわり」の四項目から構成されている。特に末尾には隅谷先生ご自身が、問題とされてきことは、信仰と社会科学、労働経済論、アジアへの社会学者としての責任であり、これらは「どれをとつても解決は容易ではないが、何とかいちおうの解答を出せたのではないか、とひそかに思っている」とまとめられている。

これらの「学問的自伝」で十分ではないか、「鼎談」とはいえ、新たに「学問的自伝」を語っていただくことは屋上屋を架すことになるのではないか、とも懸念した。しかしこれまでの「学問的自伝」は、隅谷先生おひとりの語りとなつているので、批判的観点から先生の業績を学問的に吟味することも意味のあることではないか、ということになったのである。この企画を隅谷先生にご相談すると鼎談の計画を大変喜ばれ、メンバーと鼎談の柱となる項目をご自分から上げてくださった。一九九〇年九月のことである。出版社は、一九九一年に発足する聖学院大学出版会と決定され、最初の出版物として企画されたのである。

## 2. 鼎談の企画と実施、そして公開に至るまでの経緯と理由

鼎談は、次のとおり三回にわたって実施された（肩書きは当時のもの）。

### 第一回、経済学と労働問題について

一九九〇年一〇月三日、京王プラザホテル

鼎談者 東京大学経済学部教授 中西 洋

聖学院大学総合研究所長、東京神学大学教授 大木英夫

### 第二回、信仰と社会科学、キリスト教活動について

一九九二年二月二七日、京王プラザホテル

鼎談者 明治学院大学国際学部教授 塩月賢太郎

大木英夫

### 第三回、アジアとの関わり、日本労働運動資料蒐集について

一九九二年三月八日、京王プラザホテル

鼎談者 中西 洋

大木英夫

それぞれの鼎談は、ほぼ三時間をかけてなされた。録音からすべて文字に起こし、鼎談者が原稿に手を入れ編集に入るはずであった。第一回の原稿は、隅谷先生、中西先生が原稿をほぼ書き直すまでに手を入れてくださったが、諸般の事情から、その段階で編集作業が止まってしまい、二〇年の歳月がたつてしまった。その間、隅谷先生の著作集が岩波書店から出版され、その中に収録することは可能かという打診もいただいたが、時機を逸した。

ことし、隅谷先生の召天一〇周年を記念する行事が催されることになり、あらためて、原稿を読み直し、メンバーのひとりである大木英夫前総合研究所長に打診したところ、公開する意味があるとの了解を得られた。

さらに中西洋先生に第一回だけでも公開できないかをご相談したところ、「隅谷先生の最後期のお考えが、本音として述べられていると読みました。再読する意味がいまもあると思います」と公開に賛同していただいた。中西先生は、タイトルと小見出しもつけてくださった。ここに記して感謝申し上げます。

このような経緯と理由から第一回の鼎談だけであるが、ご遺族の了解も得て刊行することが可能となった。関係する先生方にこれまでに公開できなかったことへのお詫びを申し上げるとともに、公開までにさまざまなご協力をいただいたことに感謝を申し上げます。

二〇一三年八月一五日